

「こんなん してまます。」

わだいのこいん

— 107 —

現地授業

生まれてすぐに大きな泣き声を上げる赤ちゃんに涙は出ていないそうです。涙は悲しさや悔しさ、うれしさなど「心の動き」と連動しているのです。

先頃終了した集中講義で二つの涙を見ました。

この授業は、古座川町の北海道大学研究林宿舎にお世話になり合宿形式で行うもの。古座川町は山村資源、観光資源が豊富ながら過疎高齢地でもあり現在の地方の姿を象

徴的に表す、いわば調査

学習の「宝庫」。3人の担当教員のテーマごとに6〜7人のチームに分かれ、古座川町内を踏査することで調査手法やデータ解析法を学ぶことが目的です。

筆者のチームは平井区の住民インタビュー調査。平井区は人口減少が進む高齢山村で、このような地域は限界集落などと言われます。しかし本当なのでしょうか。筆者は何度も平井集落調査を行っていますが、規則正しい仕事や生活習慣、地区の諸事への協働など活動的な姿も見えます。十

二人の涙

把一絡げに事の本質を捉えず、内実の姿に触れ、見て、調べ、考えよう、というのが今回のテーマ。2、3人一組で協力者である65歳から78歳の住民の方から個人史を聞き取り、背景となる地域社会の構造を分析しようというものです。

スポンジのような感性

語り手らの父親の仕事は炭焼き職人や物資を牛車で運ぶ運搬業でした。



た。世の中の変化と人生が重なり合っています。語り手たちの話は尽きず、学生らは必死にノートを取り彼らの人生に食らいついでいました。

この授業はハードです。最終日に発表会があり、徹夜もいとわずデータ整理とまとめをしなければなりません。さて涙ですが、あるチームリーダーが発表直前までために苦しみました。複数の語り手の記録を横断的に分析することができなかったのです。その後彼は「できなかった自分が悔しい」と言って泣きまじりました。「先生はなぜ分かるのか」と。

最終日、語り手の1人が聞き手の学生に会いに来てくれ、別れの時に1年生の女子学生と75歳の彼は手を取り合って泣いたのです。「孫のようだ」と。学生にとっては、スポンジのような若い感性が彼の人生の森に導かれ、自分を認めてもらった涙だったのでしょ



人生を聞くインタビュー

語り手の方々も幼い頃から山仕事を手伝い暮らしますが、学校を卒業する頃の1960年代、製炭業の終えんとともに彼らは町に就職するか、新しい仕事を自分で築いていかねばなりません。同時に遊びや獲物収穫の宝庫であった山川は利用されず人々の関心から薄れていきまし

るのか」と。圧倒的な人生経験に触れ彼の頭の中はデータで満杯だったはず。今はできなくてもよい。悔しさは今後「調査」という広野に立ち向かっていくためのバネになるに違いありません。

学生の涙に心を揺さぶられました。人としての成長の証（あかし）に心を打たれたのです。田舎には人情があると言っけれど、そうとは限らない。都会にだって田舎にだって人情はあったり無かったりします。しかし、広い空間とゆったりとした時間を持つ田舎の環境が、感性の吸収力を高め人の心を熟成させるのでしょうか。集中した学習機会がもたらした笑顔と涙だからこそ互いの心に響いたのです。

プロ
フィル



湯崎真梨子（ゆざき まりこ）
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。